

# 地域における「学校美術館」の構想と準備

## —地域の学校やアーティストとの連携—

美術教育講座 辻 泰 秀

美術教育講座 山 本 政 幸

飛鳥村立飛鳥学園飛鳥小学校 浅 尾 知 子

### 1. はじめに

愛知県の飛鳥村立飛鳥学園は、愛知県で初めての公立の小・中一貫教育校である<sup>1)</sup>。小・中一貫教育校であることから学園という言葉を用いている。平成21(2009)年に校舎を新築し、平成22(2010)年4月に開校した。オープン・スペースで廊下等の空間が広く、壁や床に木が多く使われている。村で一つの学校ということで、地域と学校のつながりも深い。平成24(2012)年8月に愛知芸術文化センターで開催された日本美術教育学会において、辻が飛鳥学園飛鳥小学校の浅尾知子教頭と共に学会の大会委員をした縁で、9月27日(木)に6年生でビニール傘に絵や模様を描く出前授業を実施した<sup>2)</sup>。子どもたちの造形活動への意欲はすばらしく、教職員の理解や協力も得た。

この出前授業の際に、新しくデザイン的にも優れた学校の教育空間に興味をもった。おりしも岐阜県の関特別支援学校で平成24年9月から開催している「学校美術館」を参考にして<sup>3)</sup>、「学校美術館—飛鳥学園美術館—」の企画を思いつき、浅尾教頭に「学校に現在活躍中のアーティストの美術作品を展示をして、美術館のようにしてはどうか」と提案をした。そして、知人のアーティストに協力を依頼したところ、10名近くのアーティストから賛同を得た。教職員への内容説明や児童・生徒への働きかけといった校内での取り組みも開始された。本稿では、大学・学校・アーティストとの連携の事例として「学校美術館—飛鳥学園美術館—」の構想について報告する。

### 2. オープン・スペースを取り入れた学校の教育空間

昭和30年代～40年代にかけて、日本は高度経済成長期であり、コンクリートの校舎や教室が建築された。校舎の増築は、教育施設の整備になったが、教育の画一化をもたらした。同じような大きさや形の教室が並び、壁で囲まれた空間には、机と椅子が整然と並んでいた。どこの学校であるのかわからないほど、類似した学校の空間が続出した。教師が一斉授業をする場合には、画一化された環境でもそれほど不便さは感じない。けれども、一人ひとりに応じた教育をするには、多様な教育活動に適した空間的なゆとりが求められる。児童・生徒は一人ひとり個性をもっており、興味・関心や学習の進度も異なる。個性に応じた教育をするために、一斉指導に加えて個別やグループでの指導も取り入れる。そして、空間的なゆとりを確保して、各自に適した課題や学習の方法を選択することになる。

児童・生徒が個性に応じた学習をすることを目的として、教室や廊下を仕切る壁を取り除き空間を自在に利用することが多くの学校で試みられた。飛鳥学園でも教室と廊下の中の壁がなく、廊下が教室以上の広さになっている。図書館にあたるメディアセンターも開放的である。通称「階段教室」では、階段が教室と同程度の広さで、段差を活用して音楽活動や集会もできる。1階の中心部には、全校の児童・生徒が集まるホールがあり、テーブルを使ってランチルームとしても利用されている。このように、壁をできるだけなくして教室や廊下のスペースを広くとることで、学習の個別化・個性化をしやすくしている。従来までは、学校施設の一部に多目的スペースが設けられることが多かったが、飛鳥学園では建物全体にわたってオープン・ス

ペースが取り入れられている。

また、小学校6年間、中学校3年間という校種の枠組みも柔軟にとらえて、9年間での小・中一貫教育が行われている。小・中のカリキュラムに関連性をもたせ<sup>4)</sup>、教職員の乗り入れも可能になっている。愛知県では、小学校で教員に採用されると小学校での移動が続き、中学校でも同様である。小・中学校での人事や教育研究での交流については、課題があった。飛鳥学園においては、校舎や職員室が共有され、小・中一貫教育が可能な状態になっている。ちなみに、飛鳥小学校の浅尾知子教頭の前任校は同じ校舎・特別教室・職員室の飛鳥学園飛鳥中学校で、移動後も1～9年生の児童・生徒と隔てなく接している。

### 3. 飛鳥小学校における造形ワークショップ - 「カラフル・パラソル」 -

飛鳥学園飛鳥小学校の6年生を対象にして、平成24年9月27日（木）に出前授業が行われた。題材は「カラフル・パラソル」で、透明のビニール傘にカラーの油性ペンで絵や模様を描いて、色彩的なパラソルを飾ろうという内容である。飛鳥小学校の6年生2クラスによって40本程のカラフルな傘が描かれた。1本毎に何が描かれているのかを見ることは楽しいが、いくつもの傘の並べ方や組み合わせ方を工夫すると、さらに興味が引き付けられる。みんなで描いたり鑑賞することによって、造形表現を通した相互の交流が深まる。光に透かすとより一層美しい色彩になる。9月の飛鳥小学校での実践の後、10月に愛知県豊明市立双峰小学校、11月に東日本大震災の被災地である福島県いわき市立大浦小学校、同じく11月に岐阜県美濃市立藍見小学校にて出前授業を実施し、「カラフル・パラソル」が描かれた。この4校と岐阜県立関特別支援学校での作品を含めると、200本以上のパラソルの作品が集まることになる。そのため再び飛鳥小学校に各地の児童の作品を並べて、鑑賞する機会をもつことになった。

飛鳥小学校において「カラフル・パラソル」を描いたときに、アトリエ・中庭・メディアセンター付近の螺旋階段・階段教室など、いろいろな場所で一緒に写真撮影をした。パラソルの組み合わせ方、光の照らし方によって、異なる表現効果が得られた。校内に各地で描かれた200本以上のカラフルなビニール傘を並べ、あわせてアーティストたちの作品も展示しよう、というのが学校美術館の素案である。

### 4. 図画工作・美術科における美術作品の鑑賞

小学校図画工作科、中学校美術科ともに学習指導要領において表現と鑑賞の2領域になっている。ところが、描いたりつくったりする表現活動が中心で、鑑賞は付随的な扱いであることが多い。教科書には美術館見学に関する題材や、画集等による名画鑑賞も取り上げられている。けれども、実際には、美術館見学のための時間や費用の確保が困難であったり、作品の簡単な紹介で終わってしまうことがある。

今日では、メディアの普及によって様々な学習や体験が可能になっている。世界の出来事も、映像や音声を通してあたかもその場にいるような感覚で受け止めることができる。美術作品も画集やDVD等の映像メディアによって、実物を見るのに近い状態で鑑賞が可能である。けれども、美術作品ならば本物を鑑賞する、音楽の場合にも生の演奏や合唱を聞く意味は大きい。壁面いっぱい大きな絵画作品は、図版にすると迫力が消えてしまう。筆触が施されている作品も、表面の凹凸や材質感が印刷物ではよくわからない状態になる。また、彫刻や立体作品では、量感や空間性が鑑賞する観点になるが、図版になると平面的になり立体としての魅力は減退してしまう。したがって、美術作品の本物を間近で鑑賞することの意味は大きい。

### 5. アーティストへの協力依頼

「学校美術館」では、アーティストが来校し、本物の美術作品を展示する。そして、展示した作品をもとにしてギャラリー・トークをしたり、造形ワークショップを行うなど児童・生徒との交流を行うことを想定した。ただし、今回の場合、10月頃に発案をして11月末からの実施ということで、準備期間が短いことや、作品制作・運搬・展示・広報等に伴う予算がないことが前提条件になっている。それにもかかわらず実施するためには、普段から美術制作に取り組んでおり、しかも、教育活動についても深い理解をもっているアー

ティストの参加を得ることが求められる<sup>5)</sup>。そこで、展示する作品が既にある、隣県に在住で飛鳥学園までの移動が可能である、ギャラリー・トーク等への協力が依頼できる、次年度以降の参加も期待できる、作品展示や教育活動をボランティアでやっていただける、といったことを考慮して、電話で「学校美術館」への参加の依頼をした。その結果2～3日という短期間で、10名程のアーティストの賛同を得た。

分野では、絵画が佐部利典彦（ミクストメディアによる抽象画）・水谷誠孝（テンペラ画）・清水英樹（日本画）、彫刻が早矢仕晶子（木等のオブジェ）・浅野秀男（石彫）、インスタレーションが辻泰秀（ビニール素材）・西村志磨（布と液体粘土）、視覚デザインが吉川友行（絵本）、陶芸が江村和彦、ガラス工芸が新實広記、児童・生徒とのコラボレーションが浅尾知子（屏風）である。児童・生徒がいろいろな美術を鑑賞できるように配慮した。

アーティストたちは、美術大学及び教育学部美術科を卒業・修了し、現在も個展やグループ展で作品発表を精力的に行っている。また、水谷（至学館大学非常勤講師）・早矢仕（岐阜聖徳学園大学教授）・浅野（岐阜聖徳学園大学非常勤講師）・辻（岐阜大学教授）・西村（修文大学短期大学部准教授）・江村（名古屋経営短期大学准教授）・新實広記（愛知東邦大学助教）といったように、小学校や幼稚園の教員養成、保育士養成の大学で授業を担当しているメンバーが多くなった。美術制作とともに教育活動にも熱心で、時間的な裁量しやすいのが理由である。佐部利と辻は東日本大震災のアートによる被災地支援をそれぞれ行っており、清水は岐阜県立特別支援学校で既に学校美術館の実践に取り組んでいる。浅尾と吉川は図工・美術科の教諭でもある。

## 6. 飛鳥学園での「学校美術館」の企画

学校において美術館のように作品を展示できるようにするにはどのようにしたらよいか課題になる。展示場所は、校舎内の廊下や多目的スペース等が想定される。学校は児童・生徒が活動をする場所なので、作品の破損等についての対応は万全ではない。この点については事前にアーティストの了解をとった。立体作品は空間があれば置くことが可能であるが、平面作品の場合には設置の際に工夫がいる。校舎が新しいので、釘や金具によって壁に穴をあけることは制限される。とりあえず角椅子や机を台にして壁に立て掛けることになる。

会期については柔軟性がある。画廊や美術館での作品展の会期は、通常1週間程度であるが、学校の場合は長期にすることも可能である<sup>6)</sup>。児童・生徒はもちろん、できれば保護者や地域の人々にも作品を鑑賞してほしい。個人懇談が12月3日～5日にあるので、その時期ならば保護者も来校し、同時に地域の人々も鑑賞することができる。したがって、事前に11月28日（木）の放課後までに作品の搬入をし、29日（金）の午前中にオープニングとしての作品鑑賞会及びギャラリー・トークをする予定にした。

11月29日（金）のオープニングには、アーティストが学校に来て、児童・生徒に作品や制作内容について語っていただくことを考えた。もちろん、本物の美術作品を学校に展示することだけでも意味がある。児童・生徒は、作品を見ることを通して、誰がつくったのだろう、制作の目的や意図は何か、どのような過程で作品が作られたのだろう、工夫したところはどこだろう、といった疑問をもつはずである。説明を聞いたりアーティストと交流する中で、より多くの鑑賞活動ができるはずである。アーティストも美術制作について話をするによって、作品に込められた思いや工夫を児童・生徒たちに伝えるおもしろさを体験するに違いない。アーティストのうち佐部利典彦・新實広記・水谷誠孝・早矢仕晶子・辻泰秀が当日のギャラリー・トークを担当し、全体の進行を浅尾知子が担当することになった。

今回の「学校美術館」は、年度や学期の始めから予定されていたものではなく、直前に企画された。そのため、作品鑑賞会及びギャラリー・トークについても、いずれかの学年・学級だけでも実施できればよいと考えていた。ところが、浅尾教頭が教職員に説明したところ、教職員の理解と協力を得て小・中学校の全校児童・生徒を対象にして実施することになった。この「学校美術館」の企画の概要をリーフレットを通して示すことにする。



7. リーフレットを通した「学校美術館」の概要

リーフレット作成：山本政幸

飛 島 学 園 ス ク ー ル ミ ュ ー ジ ア ム

# TOBISHIMA S C H O O L M U S E U M

■会期:平成24年11月29日[木]~12月12日[水]

- 全校での作品鑑賞会:11月29日[木]
- 一般公開(事務受付):12月4日[火]~6日[木]
- ワークショップ:12月10日[月] 講師=辻 泰秀

■アーティストによる作品展

- 絵画=佐部利典彦・水谷誠孝・清水英樹
- 彫刻=早矢仕晶子・浅野秀男
- インスタレーション=辻 泰秀・西村志磨
- 視覚デザイン=吉川友行
- 陶芸=江村和彦
- ガラス工芸=新實広記
- 児童生徒とのコラボレーション=浅尾知子

■会場:飛島村立飛島学園飛島小学校・中学校  
〒490-1434愛知県海部郡飛島村大字松之郷3-21  
☎0567-52-4001



ごあいさつ

辻 泰秀

(プロデューサー・岐阜大学教育学部教授)

愛知県の飛鳥村立飛鳥学園飛鳥小学校・飛鳥中学校は、平成22年4月に開校した先駆的な小・中一貫教育校です。新築でオープン・スペースをもつ素晴らしい教育環境をいかして美術作品を展示し、学校を美術館のようにしようというのが今回の試みです。幸い、国内外で活躍中の11名のアーティストが賛同下さいました。作品の展示に加えて、アーティストによる作品鑑賞会(ギャラリートーク)や造形ワークショップも位置付けています。また、辻の出前授業によって9月に描かれた飛鳥学園6年生の「カラフル・バラソル」の作品は、10月以降に愛知県豊明市立双峰小学校・福島県いわき市立大浦小学校・岐阜県美濃市立藍見小学校につながりました。そのような各学校のバラソルの作品も展示します。個人懇談の期間には、保護者や地域の方々にも見ていただけます。アーティストや子どもたちの個性豊かな様々な作品の鑑賞を通して、美術の見方や感じ方が深まることを期待しています。

# 第1回とびしま学校美術館



## アーティスト・プロフィール

■辻 泰秀(つじ・やすひで)…1958年岐阜県岐阜市生まれ。83年大阪教育大学大学院美術教育専攻修了後、大阪教育大学附属平野中学校教諭・附属高等学校教諭併任。現在、岐阜大学教育学部教授。美術館・生涯学習施設・学校等で毎年30回程度の造形ワークショップや鑑賞教室を実施する。

■浅野秀男(あさの・ひでお)…1952年生まれ。76年、金沢美術工芸大学美術学科彫刻専攻卒業。93年から2003年にかけて東京6回、名古屋2回、岐阜1回個展を開催。現在、岐阜聖徳学園大学非常勤講師、彫刻家。岐阜大学大学院教育学研究科美術教育専修在学中。

■浅尾知子(あさお・ともこ)…飛鳥村立小中一貫教育校、飛鳥学園飛鳥小学校教諭。

■江村和彦(えむら・かずひこ)…1970年愛知県名古屋生まれ。94年愛知教育大学大学院芸術教育(陶芸)修了。常滑市、三重県伊賀での陶芸修行の後独立。現在、名古屋経営短期大学子ども学科准教授。

■佐部利典彦(さぶり・のりひこ)…1969年生まれ、44歳。岐阜市を拠点に制作活動を行う。岐阜市では周辺の小、中学校30校をまわり、2500個の行灯をワー

クショップで制作し、光の家を制作。また、小田原のすどう美術館を拠点に個展等を行う。国内では、大宰府天満宮や東北で活動する。2012年5月には、岩手県大槌町、山田町でワークショップや展覧会を実施、カナリヤ諸島、スロベニア、内モンゴル、スペインなど海外でも制作・ワークショップを行う。同年11月には中国の張家界で滞在制作及び展覧会に参加、世界のアーティストと交流している。

■新實広記(にいみ・ひろき)…1976年愛知県豊田生まれ。2001年、愛知教育大学大学院芸術教育専攻修了。10年、「ガラスの変貌」展(ギャラリーヴォイス/岐阜)。11年、瀬戸新世紀工芸館企画展「新實広記 一畑中篇 二人展」。

■清水英樹(しみず・ひでき)…1963年生まれ。東京造形大学で彫刻家の佐藤忠良に塑像を中心に学ぶ。卒業後は岐阜市の中学校で美術を教える。現在は岐阜県立関特別支援学校にて学校美術館運営の主務をしている。制作活動においては、ここ数年自然環境をテーマにしたリサイクルアートを展開している。

■西村志穂(にしむら・しま)…長野県松本市に生ま

れる。粘土を中心に色々な素材を使った立体造形作品を制作。ものづくりワークショップなどを通して社会教育活動を実施。現在、修文大学短期大学幼児教育学科准教授。

■早矢仕晶子(はやし・あきこ)…岐阜聖徳学園大学教育学部所属。図画工作、幼児の造形表現の科目を担当。木を中心とした立体表現の制作を行っている。

■水谷誠孝(みずたに・のぶたか)…2000年、愛知県立芸術大学美術学部油画専攻卒業。02年、愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。03年、愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻研修。個展に「僕の行方」(ギャラリー和田/銀座・東京)。個展「水谷誠孝洋画展」(松坂屋本店美術第二画廊/愛知)など。日本美術家連盟正会員。日本福祉大学、至学館大学、岡崎女子短期大学非常勤講師。

■吉川友行(よしかわ・ともゆき)…名古屋市立南陽東中学校教諭(5年間勤務)。名古屋市立左京山中学校教諭(現在)。個展「Birthday」開催(大黒屋画廊、2006年)。絵本「猫が死んだ」発行。個展「太陽」開催(小さな美術館かじた、08年)。

# TOBISHIMA SCHOOL MUSEUM

アーティストの作品



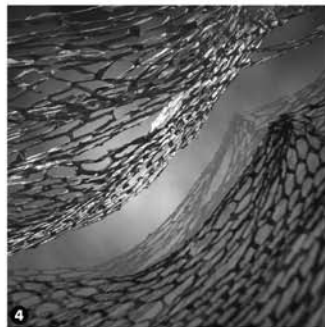
2

■辻森秀《カラフル・パラソル》◎…カラフルなパラソルを描こうというテーマで愛知県の飛鳥小学校と双峰小学校、福岡県の大浦小学校、岐阜県の藍見小学校でビニール傘に絵や模様を描きました。各地の子どもの200本余りのパラソルを校舎内に並べます。見慣れた廊下や階段が変身します。カラフルな傘のつながりのように、人の心のつながりも大切にしたいと願っています。

■浅野秀男《愛しき人1》◎…石の中にはいろいろな形があります。その形は、動いていないようでもあり、呼吸をするように、動いているようでもあります。どんな形にもなる柔らかさを持っているようでもあり、また「どんな形にもならないぞ」という、意志でもあります。それは石を彫っている私の中に、揺れ動く心があるからです。そうした揺れ動く心を見つめながら、自分と人に、愛される美しい形を探しています。



3



4

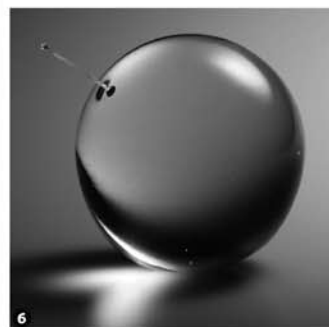


5

■西村志磨《KOMOREBI》◎…私は北アルプスが見わたせる山間の町で育ちました。なので、木々や緑の中になると自然と心が落ち着きます。キラキラ光る木漏れ日の下でゆっくり深呼吸すると、日々の嫌なことや辛いことが少しずつ消えていくような気がします。そんな、やさしく私達を包んでくれる木漏れ日を表現したいと思いこの作品を作りました。

■新宮広記《ひかりのうつわ》◎(Vessel)◎…私たちの身の回りには、ガラスでできたコップや瓶、窓などたくさんあります。でも、よく見るとガラスは透明でキラキラ光りとても不思議な素材だと思いませんか？ 私は、そんなガラスの不思議が魅力的でガラスを使って作品を制作しています。

■浅尾知子《屏風「あい」》◎…この作品のタイトル「あい」には、愛、藍、1（自分自身）、助け合い、ふれあい、出会いなどたくさん「あい」が込められています。



6



7





8

■水谷誠幸《6層のメリーゴーランド》◎…作品の制作は、夢の内容や、毎日の生活のなかで気になった言葉を書き留めておいたり、気に入った写真を貼りつけたりしてある日記帳をつくることから始まります。その日記帳を絵の材料として、完成作品と同じ大きさの下絵をつくります。初めに木の板に麻で糊んだ布を貼りつけ、白亜と膠を水で溶かし合わせ、5回以上塗ります。よく乾いたら、先に作っておいた下絵を画面に写して凹凸をつけ、金箔を貼り、テンペラ絵具で色をつけていきます。「テンペラ」とは、「粉と液体を混ぜる」という意味で、ヨーロッパの古い技法のひとつです。この作品で使った技法は、600年前の画家チェンニーノ・チェンニーニ（1360年頃～1440年頃）によって書き残された書物を参考にしています。

■佐藤利典彦《SCENE FOR PRAYING》◎…東北大地震で大きな被害を受けた岩手県の大槌町と山田町での活動で2012年の4、5月に現地で展示しました。そこで展示するために被災地への思いを込めて描いたもので、私にとって特別な作品です。アートを通して私にできることがあるということを感じたかった。描いたイメージを濃縮の白色で覆い、残した色とかたちで鑑賞者に問いかけたいです。《虹色レインボー》◎…駅ビルで制作するという悪条件の中、雨天の日は雨を利用して色をつけたり、風の日には風を利用して色をつけたり、全ての条件を受け入れながら制作してきたことや、普段なら絶対宿泊することのない商業用のビルでテントを張って宿泊し、地域の人とつながりながら活動したことを伝えたいです。



9



11



10

■清水英樹《momiji》◎…この作品は郡上の大和町にある古今伝授の里フィールドミュージアムで開催された「歌となる言葉とかたち展」に出品した作品です。秋の彩る山里のロケーションと和歌に思いをめぐらし、イメージしたものを形にしてみました。ベースは、解体家屋から出る桧です。私たちのくつろぎと安らぎを聞いてきた襖を「大地の雲みシリーズ」と題してコラージュアートに再生しています。

■早矢仕品子《2010-works》◎…私は、木の皮のざらざらした感じや、芯の部分のしっとりした感じ、彫っている時の木においごとが好きです。作品にするような大きな材みだけでなく、細い枝や木の芽にも心ひかれます。枝や芽や葉っぱは、一つとして同じ形が無く、それらをよく見つめると不思議な形が見つかります。木を材料として表現することは、私自身の喜びであり、そんな気持ちを見る人も感じてくれたらと思っています。



12



13

■江村和彦《Oh! I'm-ソコニク》◎…このロボットは、みなさんが普段使っているお茶碗やカップと同じやきもので、中は空洞です。やわらかい粘土を焼くと石のようにかたくなり、いろんな色に変わります。毎回ワクワクドキドキしながら作っています。その空洞に僕のいろんな思いを詰め込んで。

■吉川友行《絵本「キュアちゃん」》◎…私は昔から絵を描くことが好きでした。現在は、表現したり鑑賞したりすることの素晴らしさを子どもたちに伝えたいという思いで美術の授業をしています。絵本づくりは物語の世界をつかっていく楽しさがあります。子どもが絵本を手にとって読んだり、お母さんに読んでもらったりすることで、様々な世界が広がると思います。そんな絵本をつくれたらと思い、絵本づくりをしています。今回学生がつくった絵本も展示させていただきます。楽しんでいたければ幸いです。



14

## 8. 「学校美術館」の実施に向けた学校での取り組み

11月末からの学校美術館の開催に先立ち、9月末に「パラソル・プロジェクト」の出前授業が行われた。このプロジェクトでは、東日本大震災の被災地の学校との交流も含まれていることから「絆一つながり」をテーマにして実践が行われた。透明のビニール傘に絵や模様を描き、それを並べてつなげることをきっかけとして、人のつながりや絆を考えようとする意図がある。

まず、浅尾の指導で東日本大震災の様子を記録したDVDを視聴した後、地域や家族や家族との絆・つながりの大切さについて学習した。飛島村も伊勢湾に面しており、地震や津波についての学習や認識は、他人事ではない。東日本大震災の様子を知った上で、辻の指導で「カラフル・パラソル」を描いた。

飛島小学校6年生が描いたパラソルは、被災地の福島県いわき市立大浦小学校の6年生の作品につながり、カラフルなパラソルを共に描き並べることによって、コラボレーション（共同作品）にする。60cm幅のビニール傘は同じでも、それぞれの思いをいかして絵や模様をカラーの油性ペンで描くと、個性あふれた作品になる。一人ひとりの個性的な作品を並べたり組み合わせると、色彩や形の魅力が引き立つ。このような鑑賞や表現の活動を通して造形表現のおもしろさを体験するとともに、多くの友達と共に創作することの大切さを理解した。

「カラフル・パラソル」の出前授業の過程で、三つのことが確認できた。一つ目は、鑑賞活動の意味である。児童はビニール傘に描くことに加えて友達の色や形を鑑賞して、「きれい」「すてき」といった言葉を発した。また、屋内の吹き抜けや階段・中庭などいろいろな場所に移動しながら、パラソルを並べたり周りの景色との融合も楽しんでた。このような姿から色や形の美しさを感じ取る鑑賞活動が位置づいていることを確認した。そして、二つ目は、学校の教育空間の活用である。この出前授業は、美術室に隣接した広い廊下のアトリエと呼ばれるスペースで行われた。3教室以上の広さがあるので、カラフルなパラソルを並べて飾ることができた。採光、中庭の空間の取り方、オープン・スペースの配置等が工夫されているので、校内のいろいろな場所で作品の展示や鑑賞ができることがわかった。三つ目は、学校の教職員の方々の協力である。材料・用具の準備や移動、表現や鑑賞の活動場所の確保、写真やビデオ等の授業記録には、教職員の理解と協力が必要である。小・中、学年、教科を問わず全教職員で支えて下さっていることが実感できた。

平成24年8月の学会の開催に際して辻と浅尾が共同で活動をしたことが、「カラフル・パラソル」の出前授業や「学校美術館」の実施に結び付いた。けれども、問題意識は、それ以前からそれぞれにもっていた。辻は近年のアメリカの美術教育の動向であるDBAEの研究を通して、学校での美術鑑賞の授業の導入を試みた。10年程前から小学校等において対話型鑑賞法やアート・ゲームの研究をしてきた。<sup>7)</sup> 浅尾は愛知県美術館の鑑賞学習ワーキンググループに加わり「夏休み子ども鑑賞会」の開催や鑑賞教材である「あいソック」の作成にかかわった。そして、現代アートの国際芸術祭「あいちトレエンナーレ2010」の一環として飛島学園飛島中学校にアーティストを招聘して日本画の鑑賞と表現に取り組んだ。<sup>8)</sup> このような活動で培われた経験や問題意識が「学校美術館」の開催に結び付いたものと考えられる。

「学校美術館－飛島学園美術館－」を開催するにあたって、職員会議において浅尾から開催の趣旨や期間、概要を説明した<sup>9)</sup>。当初は学校に作品を展示をして、浅尾が図画工作科の授業を担当している6年生での鑑賞学習を想定していた。ところが、学園の図工・美術科担当の教諭の協力も得られることになり、他の学年の児童・生徒を対象にした作品鑑賞会やギャラリー・トークも予定された。そして、次第に理解や協力が広がり、職員会議で11月29日の午前中に全校の児童・生徒を対象にした作品鑑賞会やギャラリー・トークをすることが承諾された。飛島学園のある愛知県飛島村は、地理的には大規模な美術館が複数ある名古屋市に近いが、美術館に行って本物の作品を鑑賞したことのある児童・生徒はわずかしかない。そのため、いくつもの美術作品が学校に展示され、しかも、アーティストたちが学校に来て作品や制作内容について説明をする機会をもつことについての期待や関心が高まっていった。



## 9. おわりに

大学と学校とが連携して実践を行う場合には、事前に丁寧な準備や打ち合わせをすることが望まれる。ただし、発想したことをすぐに実行する、意欲が高まったときにタイミングよく実践に移すという活動的な姿勢も大切である。日程・予算・人的条件・物的条件等を慎重に検討している間に、様々な困難が続出して結局実現できなくなってしまうことがある。まず挑戦して、活動する中で柔軟に対応したり計画をねっていくという実践のスタイルが、今回の「学校美術館－飛鳥学園美術館－」において見受けられた。

大学教員である辻がアーティストたちに呼びかけ、学校の教育現場にいる浅尾が教職員や児童・生徒に働きかけるという双方向の協力が、「学校美術館」の実現に向けた取り組みであった。アーティストも、学校美術館の目的や内容を理解し、作品の選択や展示、日程調整等を適確に行った。あらかじめ飛鳥学園を訪問し、展示場所の下見や打ち合わせをする、児童・生徒の様子を知るというケースもあった。美術館やギャラリーは、作品展示を目的とした設計・設備になっているが、改めて学校に美術作品を展示しようとする段階取りがある。たとえば作品の見せ方、設置方法、採光、安全性等を検討する必要がある。展示場所として玄関・廊下・階段・体育館を全て含めると、学校はかなり広いので、作品数や配置も課題になってくる。

アーティストは、それぞれの作品の大きさ・色や形・素材・数量等に応じてどのような展示の方法がよいのかといったイメージをもっているはずである。ギャラリー・トークをする場合にも、どの作品を使っているかなる内容の話をするのが適切かといったことについての構想をもっているに違いない。今回の場合には、相互の考えを交流する機会が十分でない状態であった。とりあえず全体の企画と運営を辻、アーティスト相互の連絡を江村、展示の計画を新實、リーフレット作成を山本、学校との連携を浅尾が担当し、事前打ち合わせや準備のための活動が開始された。

美術館等で作品展を開催する場合には、通常1年間程の準備期間を設定する。今回の場合は、実質1カ月の間に作品の準備・搬入・展示に取り組むことになった。準備期間が短い分、改善点もでてくるはずである。ただし「学校美術館－飛鳥学園美術館－」は、本年度1回限りのイベントとは考えていない。3年間程の積み重ねをして、さらに発展できるようにであれば継続するという心構えである。オープン・スペースを多くもつという飛鳥学園の特徴はあるが、今回のような形での実施が可能であるならば、全国の様々な地域の学校でも開催できそうである。

学校美術館の開始の前日には、アーティストたちは大きな作品を車に詰め込んで1時間以上かけて移動し、展示を終えたのは晩の10時過ぎであった。準備を通して各アーティストと教職員との協力も行われた。このように、「学校美術館」の企画や準備においてアーティスト・飛鳥学園の教職員をはじめ多くの方々にお世話になった。感謝申し上げたい。「学校美術館」の実践内容、成果と課題等については、次の機会に報告することにする。

### 注

- 1) 平成25年現在において公表されている飛鳥学園の児童・生徒数は、小学校240名・中学校106名の合計346名である。各学年40名程で4・5・8・9年が1クラス、1・2・3・6・7年が2クラスになっている。
- 2) 辻が企画・実践している全国的な造形プロジェクトの一つである。色彩的なパラソルの作品をいくつも並べてつなげることによって、全国各地の学校や児童・生徒がつながる・交流することを目的としている。
- 3) 岐阜県立関特別支援学校では、校舎の新築をきっかけにして10年程前から学校美術館を開催している。平成24年度は10周年にあたり、辻も出品アーティストとして参加し、平成24年9月にギャラリー・トーク、12月には全校での造形ワークショップを行っている。関特別支援学校の実践の内容については、辻 泰秀 清水英樹 新實広記 林和貴子 「地域における『学校美術館』の実践 (1)－学校美術館の意義と実践事例－」岐阜大学教育学部研究報告『教育実践研究』第15巻 2013、を参照。
- 4) 学年は1～9年で、初等部（1～4年）中等部（5～7年）高等部（8・9年）という流れの中で学習

が発展するような配慮がなされている。中学生にあたる生徒たちが小学生の児童を教える活動も取り入れられている。このような小・中連携の基盤があったからこそ、全校の1～9年生が参加する作品鑑賞会及びギャラリー・トークが可能になった。

- 5) 各アーティストは、辻と活動を共にしたことがある。アーティスト相互は既に知人である場合があれば、初対面である場合もある。「学校美術館」の取り組みがきっかけとなって交流が広がることが望まれる。
- 6) 会期は平成24年11月29日（木）～12月12日（水）の2週間程にした。12月の初旬に個人懇談があり保護者も鑑賞することができる、会期中に展示に関連した造形ワークショップを実施できそうである、12月後半の大掃除や修業式までには後片付けを完了する、といった状況から会期が決まった。各アーティストの都合に応じて、搬入・搬出の日時には柔軟性をもたせた。
- 7) 辻 泰秀「鑑賞教材としてのアート・ゲームの作成」及び「アート・ゲームによる鑑賞活動の実践」美濃加茂市民ミュージアム紀要 第6集 2007、「美濃市における『子ども鑑賞教室』の実践—アーティストによる紙の造形作品の鑑賞」岐阜大学カリキュラム開発研究 Vol.25 No.1 岐阜大学総合情報メディアセンター 2007、「美術教育における美術批評の位置付け—アメリカのDBAEからの示唆—」岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）第60巻1号 2011、などを参照。
- 8) 実践内容は、日本美術教育学会 第61回 学術研究大会（2012）において、「『愛知県美術館と学校との連携』—コミュニケーション能力を育む鑑賞活動の取り組み—」、「一人一人の思いが広がり、心が響き合う創造活動を目指して—あいちトリエンナーレ アーティスト派遣事業に参加して—」として発表した。
- 9) 先駆的な学校美術館の事例として、村上タカシによる東京都の杉並区立和泉中学校での実践、四宮敏行による名古屋市立千種台中学校での実践がある。学校の場合には、施設の使用、教職員の協力、授業運営、外部の人の訪問等についての調整や了承が複雑であることが村上や四宮らによって報告されている。学校の理解を得て美術作品を展示する際には、「児童・生徒のため」「学校と地域との連携」という視点が求められる。